英語字幕の可能性とその限界
―トルコ娯楽映画からの考察―

The Possibility and Limit of English Subtitles
in Turkish Entertainment Films

藤田　晃代
Akiyo Fujita

序

今や国際語としての地位を確立した英語は，互いの文化や情報を伝達するための媒介言語としてあらゆる分野で非常に重要な役割を果たすようになった。互いの言葉を知らない場合でも，英語さえ理解すれば最低限の意思疎通を図ることは十分可能であり，文学やさまざまな言語芸術作品においても非英語圏の作品が英語に翻訳され，紹介されることで世界中の人々に享受され共有されるものになっている。一方ですべてを英語で済ませようとする姿勢はともすれば英語中心主義に陥り，各国の文化の独自性及び世界の文化の多様性を損なうという批判もなされている。本論ではこれら二点のせめぎあいの上にある国際語，媒介言語としての英語を今一度とらえ直す観点から，筆者のもう一つの学習言語，トルコ語との比較検討を行う。論点が煩雑になることを避けるため，比較対象は両言語の呼称に着目する。また筆者の研究軸はあくまで英語に重点を置いているが，トルコ語との比較をする場合，必要に応じて対応する日本語表現にも言及する。研究媒体としては1970年代トルコ娯楽映画を用い，字幕英語の媒介言語としての可能性とその限界を論じる。なお，トルコ語に関してはその言語，文化を尊重する観点から，本文中の初出のトルコ語名にはすべてトルコ語表記を付けて論を進めていく。(1)

Ⅰ．1970年代トルコ娯楽映画と人物呼称について

ⅰ．シリーズ映画Hababam Sınıfı

呼称の比較検証をするにあたって，まずはトルコに於ける大衆文化的背景を述べる。1970年代のトルコでは1968年に放送が開始されたテレビと競合する形で多くの娯楽映画が作られた。(2) なかでもロマンスやコメディの

人気は高く，後述する喜劇俳優が主役を演じる作品はシリーズ化するなど，市場を席捲してきた。映画はその後長らくトルコの人々の娯楽として一大市場を形成し続けるが，その多くは国内向けの娯楽であったため，吹き替えや字幕によって海外に紹介される機会は限られてきた。近年，ソーシャルメディアの発達に伴い，映画制作会社によるオンライン配信もなされるようになると，英語字幕を介することでトルコ映画が世界中に向けて紹介され，より多くの人々に知られるようになった。特にYouTube上の公式サイトでも配信されているトルコを代表する娯楽映画Hababam Sınıfı シリーズでは，前期三作の再生回数がそれぞれ数千万回を超えるものとなっており，いまだ衰えない人気を示している。本論では上記シリーズ映画の前期三作における人物呼称の問題を原語と字幕英語において比較検討することで媒介言語としての英語の可能性とその限界について論を進めていく。扱う作品はArzu Film制作のシリーズ，英語字幕はRotaract Club of Ankara Kavaklıdereによるものとする。(3)

Hababam Sınıfıシリーズは，トルコを代表する映画監督の一人，エルテム・エイルメズ（Ertem Eğilmez, 1929-1989）監督による，トルコの現代作家，ルファット・ウルガズ（Rıfat Ilgaz, 1911-1993）の同名タイトルの小説を原案とした青春コメディ映画である。(4) イスタンブールのアジア側にある全寮制私立男子高校，チャムルジャ高校（Çamlıca Lisesi）を舞台に喜劇俳優の二枚看板，ケマル・スナル（Kemal Sunal, 1944-2000）とハリト・アクチャテペ（Halit Akçatepe, 1938-2017）がそれぞれ扮するシャーバン（Şaban）とギュデュック（Güdük）を中心としたやんちゃな生徒たちと名優ミュニル・オズクル（Münir Özkul, 1925-2018）の演じる生徒指導兼歴史担当教員マフムート先生（Mahmut Hoca）をはじめ，個性的な教師陣とともに演技派女優アディレ・ナシット（Adile Naşit, 1930-1987）扮する寮母ハフィゼ（Hafize）が波乱万丈の学園ドラマを展開していく。タイトルにあるhababamであるが，数々のやんちゃを繰り返す生徒たちが集まるクラス（トルコ語ではsınıfı）の通称であり，この単語の意味は英語のrascalに相当する。英語のrascalには「いたずらっ子」という意味の他に「ならず者」という意味もあるが，Hababam Sınıfıの生徒の起こす騒動はその場のノリやいたずらが過ぎて起こった騒動が大半であるから，いわば「やんちゃ組」といったニュアンスのほうが相応しいと言える。本論で扱うシリーズ前期三作はそれぞれ，原題は “Hababam Sınıfı”（1974），

“Hababam Sınıfı Sınıfıta Kaldı”（1975），“Hababam Sınıfı Uyanıyor”（1976）であるが，各タイトルはあえて日本語タイトルにすれば「やんちゃ組」「やんちゃ組，留年」「やんちゃ組，めざめる」といったところだろう。(5) 以下，各シリーズにおける人物呼称について，先生と生徒，生徒間の関係から英語字幕と原語を比較検討していくが，本論では筆者が便宜上付けた日本語タイトル「やんちゃ組」として論を進めていく。

ii．字幕翻訳の性質と二人称をめぐる問題

英語字幕と原語の比較検討をするにあたって，まずは字幕翻訳の位置から論をすすめる。字幕翻訳に関して，鳥飼玖美子氏は異文化コミュニケーションの立場から次のように述べている。

> 「字幕翻訳は，映像作品を多くの視聴者に楽しんでもらうことが目的である。テクストは，映像と音声をともなう「オーディオ媒体テクスト」としての台本であり，訳文は限られた字数で短時間，画面に表示される。
>
> 映像を見ながら読んですぐ理解してもらうためには，何よりわかりやすさが求められる。…同時に映画やドラマの脚本であるので「表現型のテクスト」として芸術性や創造性も目標テクストで伝えなければなら（ない）。」(6)

鳥飼氏の指摘は字幕翻訳の複合的な役割を簡潔に指摘したものいえる。またドイツ映画研究者であり字幕翻訳家の渋谷哲也氏は自身の立場から次のように言及する。

> 「〈映画字幕は翻訳か？〉という質問に対し，プロの字幕翻訳家は即座に〈翻訳ではない〉と答えている。映画の台詞を観客に生き生きと伝えるために数多くの創意工夫が必要となるからだろう。字幕は台詞の要約や解説ではなく台詞そのものとして対話を構成する。ギャグや固有名詞，普段は馴染みのない事柄など直訳では伝わらない要素は訳者が工夫して補わねばならない。」(7)

字幕という限られた字数内で最大限の工夫が求められる点をまとめたこれらの文言で特に重視されるべきは，いずれの場合も字幕が一つの独立したテクストとして完成する点を指摘していることである。これは即ち，はじめに脚本があり，翻訳字幕に関してはそれをあらたに「作る」ことで一つの媒体としても完成しうるとも解釈できる。字幕に関する一連の指摘を

トルコ映画における字幕に当てはめることも当然可能であることから「やんちゃ組」シリーズの英語字幕に見られる呼称に関して論を進めるが，日本語同様，英語からの言語的距離が遠いトルコ語における人物呼称が英語字幕にどのように反映されるかについて，まずは二人称代名詞から見ていく。

相手とのやりとりに際して英語でもトルコ語でも二人称の使用に重点があるのはいうまでもないが，トルコ語の二人称単数にはsenとsizの二種類が存在する。前者は年下の者や親しい間柄に使うぞんざいな形，後者は年上や初対面の相手，距離を置くべき相手などに対して使うていねいな形とされる。この二つの二人称は常に絶対的に区分して使われるとはかぎらず，状況や関係性の変化に応じて使い分けられ，はじめはていねい形で呼び合っていた仲でも，親しくなる，言葉を交わした直後に相手が年下であることがわかればすぐにぞんざい形に切り替わるなどきわめて相対的なものである。まずはトルコ語における二つの二人称代名詞senとsizとその字幕翻訳について「やんちゃ組」シリーズから考察する。

「やんちゃ組」シリーズでは生徒は先生に呼びかける際，当然sizを使うのだが，この二人称単数のていねい形は先生同士のやり取りでも使われる。第一作ではマフムート先生が着任早々，他の先生方と教員室で初対面の挨拶を交わす場面がある。お互いに初対面のため，ていねい形のsizを使って呼びあうが，唯一，かつての同僚で旧知の友人でもある文学担当のケマル先生（Kemal Hoca）とはsenを使って再会を喜ぶ。当該場面は英語字幕では以下のようになっている。

マフムート先生：Nice to meet you.
教員（地理担当）：Welcome.
ケマル先生：Welcome, Mahmut.
マフムート先生：Oh, you're here, too.

冒頭の場面の英語字幕ではいずれの二人称代名詞もyouになっているため，呼びかけの相手による使い分けが区別されず，対人距離感も表しきれないが，原語ではマフムート先生がケマル先生に挨拶するところでyouに相当する二人称は突然senに切り替わっている。現代英語では二人称はすべてyouで済ませるために言語上では相手との微妙な関係性が表せない。場面では続いてすぐに親しい者同士の挨拶であるハグが交わされるために，二人の親しさは理解できるが，登場人物の仕草と人称が一致しないぎこちなさが残る。英語の二人称youでは表しきれない関係性は寮母ハフィ

ゼの場合にも見られる。前述したようにハフィゼは寮母であるが，学校関係者の身の回りの世話や食事，校内の清掃も引き受けていることからむしろ生活支援員的立場にあるといえるだろう。作中，その理由は詳しく述べられないのだが，家族のいないマフムート先生は赴任早々，学校敷地内の教員宿舎に住むことになる。教員宿舎での世話もハフィゼが行うことになり，対面したばかりで部屋に案内されたマフムート先生はハフィゼを呼ぶときに一貫してsenを使い，ハフィゼはマフムート先生に対してsizを使う。作中では年齢的には二人はほぼ同年代とされるが，[8] マフムート先生とハフィゼの二人称の使い分けは会って間もない間柄というだけでなく，教員と寮母という二人の校内での立場の違いをも表していると言えよう。

教員と寮母という関係を意識しているハフィゼであるが，第二作「やんちゃ組，留年」の巻に登場する新卒採用されたセムラ先生（Semra Hoca）を相手にするときは，ハフィゼは自分の娘ほどの年齢の相手に対し，はじめから一貫して二人称ぞんざい形のsenを使う。セムラ先生に対するハフィゼのこの呼びかけは他の年配の教員に対しては常にsizを使っているのとは対照的である。ハフィゼのこの姿勢はあくまで年齢の長幼を前面に表したものと解釈できる。ハフィゼが年齢の長幼を意識していることは彼女が生徒たちには一貫してsenを使っていることからもうかがえる。ハフィゼは作中一貫してセムラ先生のみ他の教員と区別してsenで呼び続けるが，「やんちゃ組」の生徒たちによる，現代の基準でいえば即刻ハラスメントとなる数々の悪ふざけに苦心しながらも，最後には毅然とうまく対応しきったセムラ先生に対してハフィゼなりにはじめから興味と関心を持ち続けていたあらわれも読み込める。大学を卒業して早々，ケマル先生の後を引き受ける形で文学担当教員として着任したセムラ先生はハフィゼにとって生徒たちとあまり変わらない若年者にすぎず，ハフィゼはセムラ先生を「自分の手に負える範囲にいる」，「より生徒側に近い，娘のような存在」としてとらえていたことが一貫したハフィゼの二人称ぞんざい形の使用に伺えるからだ。以上のように「やんちゃ組」シリーズの対人関係を読み解く手がかりとなるはずのトルコ語の二つの二人称であるが，英語ではすべてyouに吸収されてしまい，学園内での微妙な対人距離感の表現はこぼれ落ちてしまう。英語ではトルコ語の二人称のもつ対人距離感を十分表現しきれない一方で敬称表現においては字幕翻訳に多くの工夫がみられる点を次に論じる。

Ⅱ．英語字幕における敬称表現の工夫

ⅰ．トルコ人名と敬称

トルコ人名は原則としてファーストネームで呼ばれる。[9] 既述のHababam Sınıfıの登場人物名もすべてファーストネームであり，敬称も原則ファーストネームに付ける。トルコ語には英語よりも多くの敬称があり，もっともよく用いられる敬称は男性に対するbeyと女性へのhanımである。いずれも日本語の「～さん」に相当する。「～さん」が姓，名いずれにも付けられるのに対し，トルコ語のbeyとhanımは名に付けるほうが一般的である。この点は姓につけることが多い英語のMr./Ms.とは対照的である。作中で教員同士は “Mahmut Bey.” や “Semra Hanım.” のようにファーストネームの後に敬称を付けて呼びあうが，英語字幕ではそれぞれ “Mr. Mahmut.”，“Ms. Semra.” とせざるを得ない。トルコ語で「先生」を表すhocaは日本語のそれと同じく敬称であるから，「先生」であることを強調したい場合，既出のように “Mahmut Hoca.” や “Semra Hoca.” と呼ぶこともできるが，英語字幕ではMr./Ms.を使う場合と訳し分けることができない。また，作中で登場人物の姓が出てこないため，妥協策の結果としての英語字幕では，互いにファーストネームで呼ぶのが一般的であるというトルコの習慣はここでは文字通り背景に隠れてしまう。敬称をめぐる英語字幕での妥協という点では，肩書に付ける場合にもうかがえる。日本語の「～さん」同様にトルコ語のbeyとhanımはその人の職業や肩書にも付けられる場合がある。作中，度々登場するチャムルジャ高校の学校長は校長（トルコ語でmüdür）に敬称をつけて “Müdür Bey” と呼ばれる。マフムート先生に一目置いてはいるものの，何かと対立しがちな二人が言い争う場面でも校長先生への呼びかけは字幕では常に “Mr. Principal.” となっている。英語の場合，肩書に敬称の Mr./Ms.を付けるのは例えば，大統領に呼びかける際の “Mr./Ms. President.” など限られたケースであるが，ここでは字幕における敬称が作中での職位や役割を示す一種の指標を果たしているともいえる。

原語同様，英語字幕でも敬称を忠実に使い分けることで立場や役割を明確に示すことがある。ハフィゼの場合，先生方からは通常 “Hafize Hanım.” と呼ばれるが，この場合字幕ではすべて “Ms. Hafize.” となっている。一方，生徒たちは自分たちにとって親しみやすくより身近な存在である彼女を “Hafize Ana.”（anaはトルコ語で「おかあさん」の意味）と呼ん

でいる。字幕ではそのまま “Hafize Mama.” としてあるが，直訳することでハフィゼの役割が相手との関係性によって明確に示されている。シリーズ第二作の終盤では，騒動が過ぎた生徒たちが学校の風紀会議にかけられる場面があるが，会議に先立ってセムラ先生ははじめてハフィゼを “Hafize Ana.” と呼ぶ。セムラ先生にとってハフィゼは母親とまではいわなくとも，何かの時に話ができる親戚の伯母さん的な存在であり，セムラ先生とハフィゼの互いに対する見方の変化が明らかになっていく。最終場面では「全員放校処分」の危機に陥ったやんちゃ組の生徒たちから託されたバラの花束をハフィゼがセムラ先生に手渡す場面があるが，ここではじめてハフィゼはセムラ先生を “Semra Hoca.” と呼ぶ。風紀会議の結果，保護者たちが学校に呼ばれ，マフムート先生とともにこれまでの経緯の説明後，生徒たちに猛省を促すこととなったセムラ先生に対してハフィゼが教師としての姿を認めた結果と言える。残念なことにここでの英語字幕は “Teacher Semra.” と直訳になっており，相手との関係性を直訳することで明確に示すことが必ずしも言語的に適切とはいえない点も示してしまっているが，二人が互いに対して用いる呼称の変化をたどることで，二人の関係性が年の離れた他人から相手の社会的立ち位置を互いに認める関係になるまでの過程が確認できる。

トルコ語の敬称に関してはあらたまった場面で限定的に使われる尊称としてefendimとsayınがある。これらの尊称が「やんちゃ組」シリーズ第二作および第三作で使われる場面がある。学校を視察に訪れた教育省の視学官と教育大臣を迎える場面では，出迎えた先生方が来校した相手を “Efendim.” と呼んでもてなすのだが，字幕では “Sir.” となっている。このefendimが単独で使える敬称であるのに対し相手の職位の前に付けるsayınは「～様」に相当する尊称だが，大臣に呼びかける際の “Sayın Bakan.”（bakanはトルコ語で「大臣」の意味）は字幕では訳し分けられずに “Sir.” のままであった。独自の敬称は対応する語がなければ言い換えをせざるを得ない典型例だがsayınは日本語の「皆様」「お客様」のように不特定多数の相手あるいは名前のわからない相手に呼びかける際にも用いることのできる尊称であり，「やんちゃ組」シリーズでは毎年開かれる学園祭の音楽会で司会者が学校内外から集まった聴衆に呼びかける挨拶にも使われている。司会者は集まった先生方にまず “Sayın Hocalarmız.”（直訳すると「私たちの先生方」）と挨拶するのだが，英語字幕はここでは “Dear” で置き換

えられている。またトルコ語には年少の者または親しい相手にのみ付ける独特の呼称表現sevgili（意味は「愛しい人」）もあるのだが，対応する語が英語にないために同じくdearとなっている。このように見ると，作品に登場するトルコ語の敬称および尊称のほうが英語のそれよりも数が多いため，英語字幕では訳しきれない分，より少ない英単語の持ち駒でカバーせざるをえない事情がうかがえる。英語字幕を見る限り作中での対人関係性を完全に再現し，表現しつくすにはいずれにしても限界があることがわかる。

ii．先生と生徒の呼称をめぐる考察

「やんちゃ組」の生徒たちはしばし，互いをニックネームで呼びあう。もっともこれはそれぞれのキャラクターとしての演出効果をねらったものであるのだが，[10] 生徒たちも陰では勝手にあだ名で呼んでいるマフムート先生に対してはさすがにhocaを使って呼びかける。字幕ではその都度“Sir.”となるのだが，原語のhocaにはトルコ語独自の文法事項である所有接尾辞（一人称単数の場合は[-m]）がついて “Hocam.” となっている場面がある。[11] 所有接尾辞は英語の名詞および代名詞の所有格に相当するものと考えられるが，トルコ語では所有接尾辞のあるなしで対象となる人やものとの心的な距離の遠近を表すこともできるので，名詞の所有格はあっても所有接尾辞を持たない英語の字幕では反映しきれない。マフムート先生がクラス全体に呼びかける際には所有接尾辞は用いられず，作中ではしばし “Arkadaşlar.” や “Çocuklar.” などが用いられる。[12] 所有接尾辞なしで呼びかけるこの姿勢には，教師という社会的役割ゆえに客観性が求められている事情がうかがえる。それぞれの語の本来の意味はそれぞれ「友よ」「子どもたちよ」なのだが，前者は主に授業を通じて共に学ぶ相手として生徒たちをとらえている場合，後者は教師という立場から生徒を導く際に使われていることが多い。字幕では特にどちらの場合という区別はせずにguysとboysに置き換えられている。直訳した場合，意味を伝えきれないための便宜上の措置であるが，先生と生徒の呼称をめぐる字幕の工夫がはっきりとみられる箇所がある。場面は生徒たちが無断で授業を抜け出してサッカー観戦に行ってきたところをマフムート先生に見つかった箇所である。意気揚々として戻ってきた生徒たちを待ち構えていたマフムート先生は，生徒たちに “Beyler.” と呼びかける。これは前述した敬称beyの複数

形なのだが，敬称を皮肉とともに用いた例である。字幕では “Gentlemen.” となっており，gentlemenは皮肉として「諸君」という意味合いでも使えるため，訳出が効果的に表現された例といえる。

次に英語には訳しにくい，あるいは対応する呼称がないために言い換えが行われなかった，すなわち訳出されなかった例を見てみる。教師が生徒を個別に呼ぶ場合，名前（前述の通りファーストネーム）を用いて直接呼びかけることが多々ある。相手により心的に近づいている，寄り添っている場合，生徒個人に対して所有接尾辞を付けて “Oğlum.” と呼ぶ場面がある。悪さをした生徒を問いただし，諭して猛省を促す場面で使われるのだが，直訳するとmy sonとなるこの呼びかけは，字数制限もあってか，作中ではとくに訳出されていない。さらに心的に近くなるyavrum（「愛しい子」の意）も訳出されないか，kidとして字幕英語で一度登場するのみであった。英語字幕の呼称では以上のように言い換えを駆使するか，あるいは状況から関係性が明らかな場合はあえて訳出をせずに先生と生徒の関係性を最大限表現しようとしている様子がうかがえる。

Ⅲ．シリーズ第三作に見る生徒間呼称をめぐる考察

ⅰ．「編入生」をめぐる呼称

シリーズ第三作目「やんちゃ組，めざめる」では，やんちゃ組の生徒たちと編入生アフメット（Ahmet）の交流がストーリーの中心となる。やんちゃ組にはそぐわないほど成績優秀なためクラスメートとすれ違いがちだったアフメットが，卒業後，村の小学校教員になり，元クラスメートたちと交流をするまでの過程を生徒間呼称の変化にたどっていく。

父親を亡くした後，経済的な問題で高校を中退せざるを得なかったアフメットはかつて名門校，コンヤ高校（Konya Lisesi）[13] で教わっていたマフムート先生を頼ってチャムルジャ高校の雑用係として雇ってほしいとやって来る。マフムート先生はアフメットがかつて優秀な生徒だったことからクラスに編入させ，授業料も肩代わりすることを校長先生に了承させる。アフメットに高校卒業資格を取らせるため，悪ふざけを繰り返す他の生徒たちとできるだけ交わらないようにさせるマフムート先生の再三の注意にもかかわらず，やんちゃ組の生徒たちはあれこれとアフメットをそそのかす。アフメットに対していろいろ仕掛けようと画策する中心となるのはシャーバンだが，シャーバンがいろいろな策を他の生徒たちに呼びかけ

る際に使う語，arkadaşlarやçocuklarは英語字幕では訳出されない。状況から判断してこれら字数のかかる語を訳出する必要はないと判断がされたものとみられるが，本来シャーバンのこの呼びかけはやんちゃ組の仲間意識を表したものであり，一方でアフメットは単に “Ahmet.” と呼ばれるだけである点を考えると原語から本来うかがえるはずの「身内」の生徒と「よそ者」のアフメットという図式が消えてしまう。

アフメットとやんちゃ組の生徒たちの関係の変化は彼に対する呼称の変遷に見て取れる。アフメットが教室に初めてやってきた場面は英語字幕では以下である。

マフムート先生（生徒たちに）: Guys, sit down for a moment.
（アフメットに）: Come, Ahmet, come.
（生徒たちに）: His name is Ahmet.
シャーバン（繰り返して）: Ahmet.

わずかな時間の中でアフメットの名が繰り返される。このことはこれから彼がクラスの一員になるという存在感を強調するものと同時に，アフメットという一人の優秀な生徒がやんちゃ組のメンバーとは未だ一線を画した存在であることも示唆している。マフムート先生は，やんちゃ組の生徒を前に，アフメットがいかに優秀な生徒であるかを告げた後で，悪さやそそのかし，いたずらを絶対にしないように繰り返しくぎを刺す。ところが生徒たちはそのような言いつけを守るはずもなく，転入したばかりのアフメットは早速喫煙をすすめられてしまう。アフメットを取り囲んで喫煙をそそのかす生徒の一人は彼を“Oğlum.”と呼ぶ。前述したとおり，この表現は直訳すればmy sonの意味だが，同年代の者に対して使われる場合，心的に近い存在としてとらえているというよりもむしろ相手を少し下に見つつ自分たちの側に引き込もうと試した言い方と解釈できる。アフメットを数々の悪さに誘い込みながらもクラスの一員にしようとシャーバンとギュデュックもことあるごとに彼を “Arkadaşım.” と呼び続ける。所有接尾辞付きの呼称は生徒たちが何とかしてアフメットをやんちゃ組に「ふさわしい」生徒側に引き入れたいという意味での心的な近さを表すはずなのだが，英語字幕ではすべて “You.” となっている。この場合のyouは相手に注意を促す呼びかけとしての機能を果たしているにすぎなくなる。さらに英語は名詞の所有接尾辞を持たないゆえに字幕では原語での呼称の使い分けによる生徒間の微妙な関係性も表現しきれない。微妙な関係性を敢えて

訳出すれば，所有接尾辞の代わりに代名詞の所有格を使った “my friend” という表現は可能だが，これではニュアンスごと変わってしまうおそれもある。アフメットとやんちゃ組の生徒たちの繰り広げるエピソードだけを追うには英語字幕も十分な役割を果たしているが，英語とトルコ語の文法上の差異，さらに直訳では本来の意味が伝わらないニュアンスが立ちはだかるゆえに，英語字幕では近しい関係性の表現に対する限界があると言える。

ii．やんちゃ組の生徒とアフメットをめぐる呼称の変化

アフメットへの呼びかけが英語字幕でも訳出される例がある。昼食時に食堂に集まったクラスメートの前でギュデュックがアフメットにいたずらを仕掛ける際，“Ahmet Bey！” と呼ぶ場面では “Mr. Ahmet！” とそのまま訳出されている。これは本来の呼称というよりもわざわざ訳出することでこれからアフメットの身に「何か」が起こることを観客ないし視聴者に予告する効果を表すものと考えられる。そして直後にアフメットはギュデュックから仕掛けられたいたずらに次々嵌ってしまう。さらに試験時にアフメットに不正行為への加担をそそのかす際の “Kardeşim.” という呼びかけは “My dear brother.” と字数を使ってまで訳出されている。この不正行為へのそそのかしは，成績優秀な彼を盾にしてやんちゃ組の生徒が自分たちの不正行為に対する疑いと処罰を逃れる目的から出たものであるが，字幕において字数を割いてでも呼称がわざわざ訳出される場合は，直後にアフメットが何らかのハプニングに巻き込まれる際の予告ともいえる指標として機能していると言えよう。

一方で，シャーバンとギュデュックは悪ふざけをたくらむ際には互いの名前に所有接尾辞を付けて “Şabancım.” “Güdükçım.” と呼び合う。ファーストネームに付ける所有接尾辞は日本語の「～ちゃん」に近い表現なのだが，字幕では所有接尾辞なしのファーストネームがそのまま使われる。前述したとおり，所有接尾辞を持たない英語では所有接尾辞あるなしの呼称の意味合いの区別ができないため，呼称に現れる違いを読み解くには限界がある。名詞所有格を付けて「代用」するとしても先に述べたようにニュアンスが丸ごと変わってしまう場合が多々ある。特に英語では固有名詞を代名詞の所有格付きで呼ぶと古風になってしまう場合もある。(14) また，誰が誰に呼びかけているのか映像から明らかな場面でわざわざ呼称を字幕に

出す場合，生徒に何かが起こる（あるいは生徒が何かを起こす）「予告」として機能しているとも考えられ，「やんちゃ組」では悪ふざけやいたずらが毎回いつも思わぬ方向に展開してさらなるハプニングが引き起こされていく。

トルコ語では呼称における所有接尾辞のあるなしによって発話時の相手との心的距離を表現し分けることが可能であり，「やんちゃ組」シリーズでは生徒間の呼びかけの際に二つを巧みに使い分けることで直後に起こる騒動を観る側に「予告」する機能も果たしているが，英語字幕ではこれらの区別はできないため，物語展開において比較的大きな転換点になる際のみ字数を使って呼称を訳出している。さまざまないたずらや悪ふざけに巻き込まれたアフメットだが，寮で生活を共にするうちにやがて他の生徒たちとの関係を築いていく。アフメット自身もやんちゃ組の生徒たち一人一人は本来悪い人間ではないことを十分理解しており，他の生徒たちと距離を置いて卒業資格を取るための勉強に集中するようマフムート先生から諭された際もそのことを述べている。中盤を過ぎてアフメットは校庭の隅にある池に生徒たちによって同意のうえで落とされる場面があるが，シャーバンは彼をはじめて所有接尾辞付きで “Ahmetçim.” と呼ぶ。ここに至ってアフメットが巻き込まれた一連の出来事はイニシエーション（通過儀礼）であったことが示される。突然現れた一人の編入生がやんちゃ組の一員になるまでを呼称の変化で追うことは原語では可能だが英語字幕では訳出できない。そのため字幕ではアフメットはクラスメートに受け入れられた後もAhmetにすぎず，彼個人を表す固有名詞として表示されるにとどまる。英語の固有名詞での呼びかけが一人の自立した人間を示すのに対し，トルコ語の所有接尾辞付き固有名詞のそれは周囲との関係性から人の存在をとらえる表れといえる。このことからは両言語の差異だけでなく，両文化の差異も読み取れるだろう。

学校物語としてトルコ娯楽映画の代表作となったHababam Sınıfıシリーズは英語字幕によってより広く知られるようになったが，トルコ語と英語という言語間の距離が比較的大きい言語同士では呼称をめぐっても訳出しきれない要素が多い。これはトルコ語には英語よりも数の多い呼称や敬称が存在することや所有接尾辞付きの呼称が個人の社会的な役割や他の人との相対的な関係のなかで位置づけられる特徴によるものといえる。したがって呼称をめぐる原語と字幕の相違は両言語間の相違を完全に埋めるこ

との限界を示している。その一方で，英語字幕では英語に存在しない表現や文法事項を他の表現で言い換える，あえて訳出をしないなど，原語本来の持つ意味合いが時に十分伝わらないとしても字幕翻訳によって一つの芸術としての映画が紹介される意義を示した。これまで海外に紹介される機会が少なかったこともあり，日本国内ではあまり馴染みのないトルコ映画であるが，観光や食文化にとどまらないトルコの様々な文化が徐々に海外に知られるようになり，近年ではドラマの海外進出が進むなど，文化理解の垣根が低くなってきている。[15] とかく英語圏とその文化に関心が傾きがちな昨今の情勢にあって，複数の言語を知り，さらにその文化を理解することは言語使用や表現に際して，それらをより客観的にとらえ運用する一助となるのではないか。

結

映画Hababam Sınıfıは今でも往年の名作としてファンの間で親しまれている作品である。2000年代に入って、チャムルジャ高校のその後を描いた新シリーズも公開されるなど [16] その人気は衰えることなくファンの間で支持されてきた。Hababam Sınıfı シリーズには文化的な差異そして時代を超えて笑い，共感できる場面が多々あり，世界中でより多くの人々が鑑賞できる機会を増やした字幕翻訳の役割は大きい。また字幕の訳出にあたっては，英語とトルコ語という言語間の距離が大きい言葉同士，英語には訳しきれない要素を最大限工夫する一方でその限界も見られた。他の言語や文化を知るための初めの扉となる英語学習はもっとも尊重され奨励されるべきだが，英語のみ重視するあまり英語一辺倒になることは多様な視点を欠いた英語中心主義に陥ってしまう点をはらんでいることも重ねて記しておきたい。

（筆者は，言語と文化に関する関心から2011年より継続的にトルコ語を学習し，今回の執筆に至ることができた。この間の学習手段は独習が多くを占めていたため，思わぬ認識不足がある可能性は否めない。学習継続に際して用いたトルコ語学習教材はすべて紹介しきれませんが，それらを執筆してくださった方々とトルコ語に関する論文を執筆してくださっている方々にあらためてお礼を申し上げます。）

註

（１）トルコ語は日本語や韓国・朝鮮語同様に，それぞれの単語の後に助詞に相当する後置詞を接続して文法関係を表す膠着語である。基本語順も主語，目的語，動詞の順であり，表記はラテンアルファベットを用い，一部を除いてローマ字読みができる。短母音，長母音の区別や日本語の促音に相当する二重子音，助数詞の存在など英語にはない特徴があるが，日本語話者にとっては比較的学びやすい側面もある。文字と発音であるが母音は八母音あり，日本語の五母音に近い母音の他に[ı]（口をすぼめない「ウ」の発音），[ü]（拗音の「ュ」を単独で発音した場合に近い音），[ö]（「オ」よりも両唇を「エ」に近づけて発音する音）がある。子音に関してはchの音を表すçとshをあらわすşという特殊文字に加えて，発音はされないが，母音の直後につけて長音を表すğがある。w，x，qは外国語を表記する場合のみに使われ，cは英語のjの音になる。本文中の語、「先生」を表すhocaは「ホジャ」と読み，トルコ語読みに従えば「通り」を表すcaddeは「ジャッデ」と促音を入れた発音になる。「息子」の意味のoğluは「オール」と長音になる。外国語からの借用語も多く，アラビア語やペルシア語の他，近代以降ではフランス語からの借用語が多く見られる。（「高校」を表す単語liseはフランス語からの借用語の一例，本文中では所有接尾辞付きとなっている）さらに現代では英語からの借用語が多くなっているのが実情である。

（２）Hababam Sınıfı, Vikipedi,（film）（https://tr.wikipedia.org/wiki/Hababam_Sınıfı_(film)）2022. 5.31閲覧。もっとも，70年代のトルコ映画にとってテレビという新たな媒体は脅威となったはずであるが，本論でも言及したケマル・スナルをはじめとする俳優陣の出演する他の映画作品ではテレビがより素早く情報を伝えるツールとして，出演者が人気や名声を得る手段として，その社会的役割が描かれている。また，人々がテレビのある場所に集まって一同で視聴するという1960年代前半頃までの日本の風景を想起させるような場面が70年代トルコ映画においてしばし見られる。本論で取り上げる「やんちゃ組」でもおなじみのケマル・スナル主演の「顔が広い男」（“Yüz Numaralı Adam” 1977 ）（邦題

は筆者による拙訳）は，数々のテレビCM出演をきっかけに「お茶の間のヒーロー」となった主人公の顛末を描いた作品として知られる。CMロケの場面に於ける多くのエキストラの使用，テレビ局のスタジオを再現したセット，中継車を登場させるなどその演出は本格的である。その一方でテレビに夢中になりすぎる人間の姿を極端なまでに戯画化した映画「テレビ人間」“Televizyon Çocuğu”（※同じく邦題は筆者による拙訳）が1975年に封切られていた点も人々のテレビとのかかわりを知るうえで参考になる。（※なお，当作品には今日の社会通念，倫理に照らし合わせて適切とはいえない表現や場面が散見されるが，テレビを取り巻く当時の社会状況をとらえるうえで意味のある作品と考え，ここに言及した。）また，映画全般に関しては，すでにカラー化され鮮やかな色遣いや演出が可能な映画に対し，モノクロのテレビは映画のなかでは場面にコントラストをもたらす映像効果ももたらしていたともいえる。トルコでテレビがカラー化されたのは1981年であった。

（３）Hababam Sınıfı diziler, Arzu Film. Full HD, 2015.（http://www.youtube.com/c/ARZUF%C4%B0LM ）2022. 5.22-5.24閲覧。

（４）大半の翻案シナリオがそうであるように，Hababam Sınıfıシリーズも多くの脚色がなされており，映画のシリーズは映像効果をねらった大げさ且つコミカルなアクションに満ちている。また，アクションだけでなく，まるでかつて日本国中で大人気を博したドリフターズによる「学校コント」を思い起こさせるような，生徒たちによるとぼけた解答の連発も笑いを誘ってやまない。

（５）Hababam Sınıfıシリーズは，本論執筆時の2023年初頭に至るまで日本国内で興行として上映がなされていないため，興行上映用の邦題を持たない。ここでは筆者が便宜上付けた日本語タイトルにしてある。また，以降の註内に於ける他の映画作品の邦題に関しても筆者による拙訳とするが，訳に際しては内容を踏まえたうえで直訳を避け，意訳した箇所もある。註（２）の言及作品名も直訳すればそれぞれ「顔が多い男」,「テレビの子ども」すなわち「テレビっ子」でも構わないだろうが，前者は「多くの人に知られている」という意味で日本語の表現として定着した「顔が広い」という表現を採用した。

後者は成人の主人公がテレビを巡って巻き起こすストーリーが戯画化されているという点から「テレビ人間」とした。

（６）鳥飼玖美子，『異文化コミュニケーション学』岩波書店，2021年，46-47頁。

（７）渋谷哲也，「映画字幕の冒険―翻訳以上，創作未満」『文芸翻訳入門：言葉を紡ぎ直す人たち，世界を紡ぎ直す言葉たち』藤井光編，フィルムアート社，2017年，227-247頁。

（８）それぞれの役を演じるミュニル・オズクルとアディレ・ナシットはArzu Filmの他作品では息の合ったコンビとして夫婦役を演じている。ホームコメディ映画「私たち家族」（“Bizim Aile” 1975），「笑い顔」（“Gülen Gözler” 1977），「素晴らしい日々」（“Neşeli Günler” 1978）は二人の共演による人気作である。（各邦題とも筆者による拙訳）

（９）すべてのトルコ人が姓を名乗るようになったのは1923年のトルコ共和国建国以降という歴史的背景もあるが，習慣として名乗る際，呼びかける際にはファーストネームを用いる。

（10）近年，日本国内では教育現場においていじめ防止の観点からあだ名を禁止している場合があるが，「やんちゃ組」では各生徒が互いにニックネームを付けあうことでクラスの一員としての存在感を示すだけでなく，キャラクターにふさわしい役割を果たすことでクラスの一体感を高める効果をもたらしている。

（11）トルコ語ではほぼすべての名詞の語尾に所有接尾辞を付けることができ，付ける場合と付けない場合とで所有する側と対象の関係を表すことができる。一例をあげると，bu çantaは単に「このバッグ」の意味だが，一人称単数の所有接尾辞[-m]を付けてbu çantamとすれば「私のこのバッグ」のように所有先を明示できる。所有接尾辞は所有する側の人称と名詞の単数複数ですべて形が変わるが，変化は規則的なので慣れれば比較的覚えやすい。

（12）トルコ語では，同僚や仲間内に呼びかける際にこれらの表現がしばし用いられるようである。例えばトルコ国営放送（TRT）ではアナウンサーが中継でつながっているレポーターや取材クルーに対して，あるいはレポーターがカメラマンや他の同僚に向かって“Arkadaşlar.”と呼びかける場面がままある。日本のテレビであれば「○○さん」と名前で呼ぶか，「スタッフさん」「カメラさん」の

ように職業の役割に敬称を付けて呼びかけるところだろう。また集まっているのが比較的近しい人であれば 相手が子どもでなくても “Çocuklar.” と呼びかけることも可能のようだ。なお，日本語のように職業に敬称を付けて呼ぶ言い方はトルコ語にも存在するので，また別の機会に論じることができればさいわいであると考えている。

(13) 映画の舞台となったチャムルジャ高校の「チャムルジャ」という地名はイスタンブールのアジアサイドに実在する地名ではあるが，チャムルジャ高校は架空である。一方，コンヤ高校はトルコ中央部アナトリア地方の都市コンヤに実在する高校の名である。コンヤはセルジュークトルコ時代の歴史的建造物が多く残る古都であり，京都市と姉妹都市になっている。

(14) 例えば，19世紀ヴィクトリア朝を代表する探偵小説，シャーロック・ホームズ（Sherlock Holmes）のシリーズでは，主人公ホームズ（Holmes）が友人のワトソン博士（Dr. Watson）を “My dear Watson.” と繰り返し呼んでいるが，ドラマの字幕や吹き替えおよび翻訳では仰々しくならないようにしばし「ワトソン君」となっている。

(15) 今井宏平氏はその著書『トルコ現代史：オスマン帝国崩壊からエルドアンの時代まで』中央公論新社，2017年において「近年，トルコのテレビ・ドラマが海外で人気である。近隣の中東や中央アジアにとどまらず，遠く南米でも人気を博している」（285-286頁）と述べている。人気の理由について今井氏は特に述べていないが，中東は同じイスラム圏であり，中央アジアもイスラム圏，さらに言語面でも共通のトルコ系民族の国が多いことを考えればトルコドラマの人気はうなずける。南米での人気については，南米は新興国が集まるエリアであるゆえに生活様式などで人々の共感を得やすい面があるものと考えられる。また氏の言葉はうらを返せば英語圏ではまだまだトルコドラマが広く知られていないことも示唆している。

(16) 2004年公開の新シリーズ “Hababam Sınıfı Merhaba” （拙訳「やんちゃ組，ふたたび」）では，共学となったチャムルジャ高校のその後が舞台となる。新校長が投資目的から学校売却を画策し，売却に反対する教員から相談を受けた元生徒でカフェ経営者のギュデュックおじさん（演じるのは同じくハリト・アクチャテペ）が売却を阻止するため教員になりすまして学校に潜入することから騒動が始まる。

生徒たちは相変わらず問題行動を繰り返すが，「教員」になったギュデュックはマフムート先生を真似たセリフを言い，生徒を「指導」する際もその振る舞いを真似る。その一方で生徒とともに学校を抜け出してサッカーの試合を見に行くなど作品はいわゆる楽屋オチに満ちており，評価は様々なようだが，70年代のシリーズを彷彿とさせる展開が特徴である。公開時にはシャーバンを演じたケマル・スナル，ハフィゼ役のアディレ・ナシットはすでに他界していたが，ギュデュックが高校時代の過去を回想する場面ではシャーバンが声で登場する。また最終場面は学校主催コンサートで，往年のシリーズの学園祭に職員代表で登場し歌ったハフィゼ役アディレ・ナシットの歌声のカバーで終わる。70年代のシリーズを知るファンを意識した演出であることがわかる。

参考文献

Arzu Film. “Hababam Sınıfı.” Yönetmen, Ertem Eğilmez, 1974. https://www.youtube.com/watch?v=hf2-8MRPGu8（2015年配信開始）2022年５月22日閲覧。

————. “Hababam Sınıfı Sınıfıta Kaldı.” Yönetmen, Ertem Eğilmez, 1975. https://www.youtube.com/watch?v=6M2N1dztNU0（2015年配信開始）2022年５月23日閲覧。

————. “Hababam Sınıfı Uyanıyor.” Yönetmen, Ertem Eğilmez, 1976. https://www.youtube.com/watch?v=4rAnNKCxinc（2015年配信開始）2022年５月24日閲覧。

橋本陽介。『７カ国語をモノにした人の勉強法』祥伝社，2013年，2014年，第４刷。

藤井光編。『文芸翻訳入門：言葉を紡ぎ直す人たち，世界を紡ぎ直す言葉たち』フィルムアート社，2017年。

今井宏平。『トルコ現代史：オスマン帝国崩壊からエルドアンの時代まで』中央公論新社，2017年。

勝田茂。『トルコ語文法読本』大学書林，1986年，2005年，第七版。

————。『中級トルコ語：読解と応用作文』大学書林，2007年。

川口裕司。『一冊目のトルコ語』東洋書林，2010年。
北村紗衣。『批評の教室―チョウのように読み，ハチのように書く』筑摩書房，2021年。
Meriç Deniz ve Gordon Jones. *İngilizce Standart Sözlük*. Fono Özel Eğitim Kurumrarı, 2016.
水野美奈子・ヤマンラール，アイデン・ヤマンラール。『全訳　中級トルコ語読本』大学書林，1996年。
野田納嘉子。『ゼロから話せるトルコ語：会話中心』三修社，2006年。
Özükan, Bülent. *New English Dictionary*. Boyut Yayın Grubu, İstanbul, 2007.
ピーターセン，マーク。『心にとどく英語』岩波書店，1995年，2015年，第20刷。
桜木俊行。『映画で異文化体験：異文化コミュニケーション講座』近代映画社，2013年。
渋谷哲也。「英語字幕の冒険―翻訳以上，創作未満」，藤井光編『文芸翻訳入門：言葉を紡ぎ直す人たち，世界を紡ぎ直す言葉たち』フィルムアート社，2017年。
白井恭弘。『外国語学習の科学―第二外国語習得論とは何か』岩波書店，2008年，2016年，第16刷。
東京外国語大学言語モジュール（トルコ語）
http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/tr/index.html（2011年以降不定期閲覧。）
鳥飼玖美子。『異文化コミュニケーション学』岩波書店，2021年。
上野千鶴子。『映画から見える世界：観なくても楽しめる，ちづこ流シネマガイド』第三書館，2014年。
Vikipedi. Hababam Sınıfı（film）
https://tr.wikipedia.org/wiki/Hababam_Sınıfı_（film）2022年５月31日閲覧。